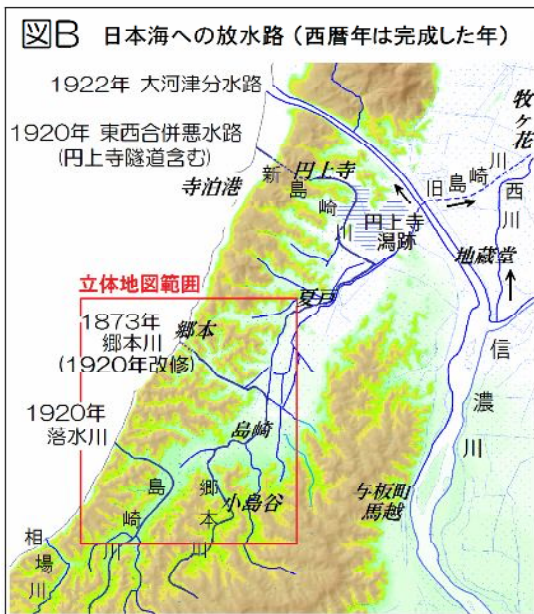
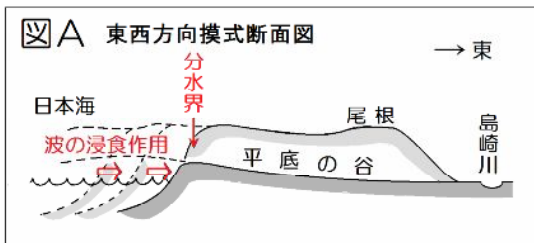
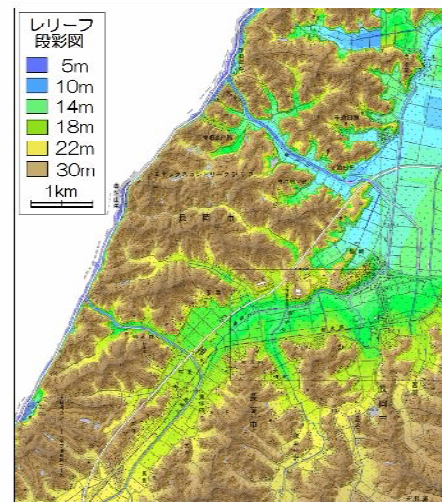
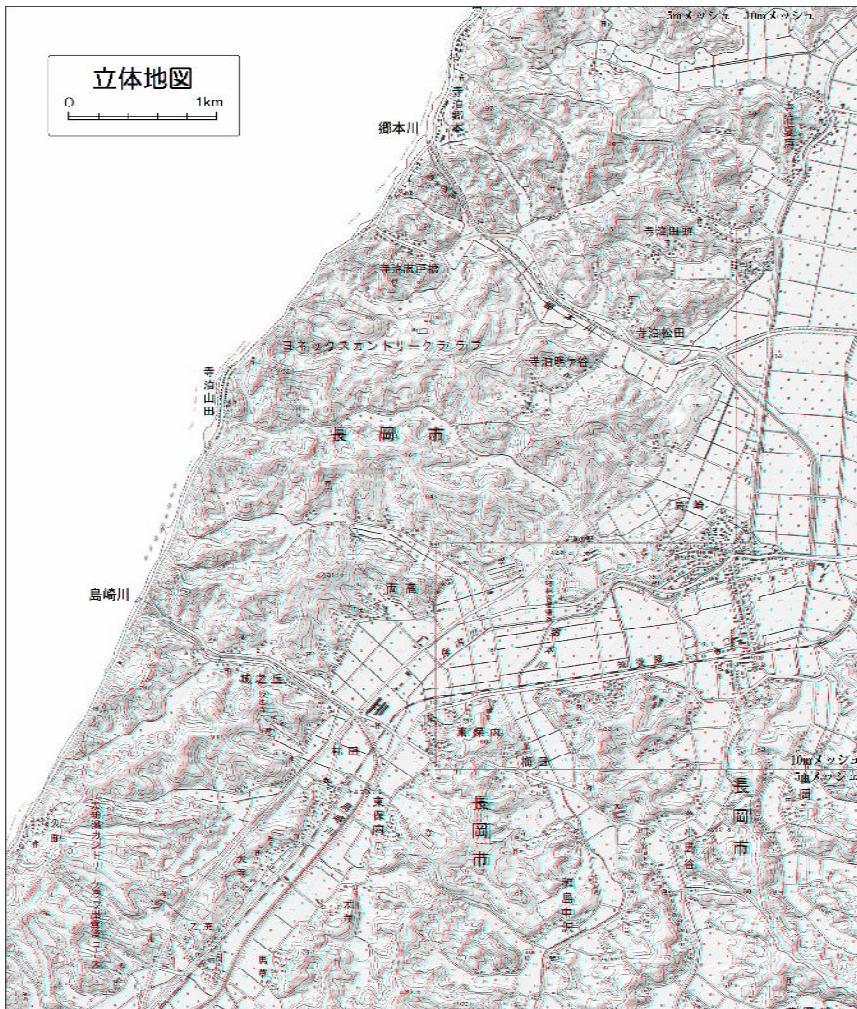


## 2. 旧島崎川沿い低地の谷内田と放水路（長岡市島崎周辺）



標高 100m 前後の丘陵地帯に、旧島崎川がつくった氾濫原（はんらんげん）（堆積低地）が広がっています。丘陵部は島崎川の支流によって開析が進み、平底で狭長な谷地形が細かく樹枝状に丘陵に入り込んでいます。この細長い谷と氾濫原（レリーフ段彩図で青～緑～黄色部分）には砂や泥が厚く堆積しており、おもに水田地帯です。谷間に発達する水田は「谷内田」（やちだ）と呼ばれます。

日本海と旧島崎川沿い低地の間の丘陵は、東へ（旧島崎川へ）向かう谷が発達しているのに対して、西へ（日本海へ）向かう谷が発達せず、両者の分水界がいちじるしく日本海寄りにある非対称地形です。これは日本海の荒波による陸地（丘陵）への活発な浸食作用によって海岸線が後退したためと考えられます（図A参照）。

図Bに示すように、大河津分水開通以前の島崎川は燕市牧ヶ花で西川と合流しており、河床勾配が小さいため排水不良の悪水（あくすい）として知られていました。そのため大河津分水付帯工事として図に示すように新島崎川・郷本川（改修）・落水川を開削・整備し、悪水のすみやかな排水をはかりました。このように日本海へ排水できた理由の一つは、平底の谷が海岸近くまで発達していたことです。ただし今でも豪雨時には旧島崎川やその支流が氾濫することがあります（2004年 7.13 水害では旧和島村で浸水家屋 264 戸）。